宇治橋〔初あは孝徳天皇の御宇大化二年に、道昭和尚これを造ると、日本後紀に見へたり。橋は丑寅より未申に架す、長さ八十三間五尺五寸、橋の東爪は宇治郡、西は久世郡なり。近年宝暦六年山城近江洪水の時、此橋堕流す、是故に今仮橋をかくる〕

宇治橋銘〔扶桑略紀に載す、撰者詳ならず〕

況々横流。　其疾如レ箭。　条々往人。　倚騎成レ市。　欲レ■レ重次。

人馬亡レ命。　従レ古至レ今。　莫レ知二杭葦一。　世有二釈子一。　名曰二道昭一。

大化元年。　丙午之歳。　摂二立此橋一。　済二度人畜一。　即固徴レ善。

爰発二大願一。　結二因此橋一。　成二果彼折一。　法界衆生。　普同二此願一。

夢裡空中。　導二其苦縁一。

壬二集　宇治橋や夜半の河風更にけり下行水のをとばかりして　家隆

弘安元年宇治橋供養の日、亀山院御幸ありけるに

続後拾遺　行すゑも道はまどはじためしなきけふの御幸の跡を残して　円光院入道関白

されば橋は、秦の時咸陽に都として渭橋を造り、漢は便門橋を作る、張良は■橋にして兵書を授かり、相如は橋柱に題して駟馬の車に乗ず。此橋桓武帝の御時架し初しより、南方の喉口となる。それより年ふりて、治承には此橋を断て三

井の法師等両岸の大軍を驚し、元暦には又橋を引て先陣を争ふ、承久の乱及びたび〳〵の戦ひに、宇治勢田の橋を引事かず〳〵なり。物換り星移りて、豊臣の御代には三の間の水を賞し、霞におつる柴舟は山吹の瀬をはやみ、川霧の絶〴〵に釣する舟の波に泛み、あるは岩間によりて年魚を汲、河辺に棹さしめぐりて蛍の飛かふを興じ、美景窈窕として、山水は清暉を含、虹の影は河流に架す、寔に南方の奇観にして、象を鶉鳳にとりて李氷が造れる七星橋ともいひつべし。

朝日山

〔離宮八幡、興聖寺などの後山をいふ〕宇治里よりの東にして、此峯より朝日出て春の日の遅々たるを知る。又中秋にも月を賞して、清光川の面照そふけしき、銀色三千界の面影なるべし。

新　古　麓をば宇治の川霧立こめて雲井にみゆる朝日山かな　　権大納言公実

続　古　紅葉散る山は朝日の色ながら時雨てくだるうぢの川波　　西園寺入道前太政大臣

続千載　朝日山麓の里の卯花をさらせる布と思ひけるかな　　左京大夫顕輔